

# 昭和初期における体験主義に基づく 郷土教育の理論と実践手法

寺崎 真由<sup>1</sup>・山口 敬太<sup>2</sup>・谷川 陸<sup>3</sup>・川崎 雅史<sup>4</sup>

<sup>1</sup>学生会員 京都大学 大学院工学研究科 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂)

E-mail: terasaki.mayu.53m@st.kyoto-u.ac.jp

<sup>2</sup>正会員 京都大学准教授 大学院工学研究科 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂)

E-mail: yamaguchi.keita.8m@kyoto-u.ac.jp

<sup>3</sup>正会員 京都大学助教 大学院工学研究科 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂)

E-mail: tanigawa.riku.6c@kyoto-u.ac.jp

<sup>4</sup>正会員 京都大学教授 大学院工学研究科 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂)

E-mail: kawasaki.masashi.7s@kyoto-u.ac.jp

本研究では、昭和初期の大分県女子師範学校における体験主義の郷土教育に着目し、学習カリキュラムや指導内容の実態を明らかにした。我が国では、大正後期に児童の生活や体験を基礎とする新しい郷土教育の考え方が生まれ、昭和初期に文部省の政策の中で体験教育が重視されるようになった。なかでも、大分県女子師範学校では郷土の調査方針が確立され、学年ごとの学習配当案の中で児童に何を学ばせるかが詳細に示された。児童主体の発案のもとに学校外での実地踏査を行い、自然と人との豊かな関係性を肌で感じ、その情感を芸術表現させる指導がなされた。これにより、児童が体験・認識する郷土の範囲を拡充し、郷土愛や郷土自治の精神を涵養することで、郷土の改善や発展を企画する人材の育成が意図された。

**キーワード:** 郷土, 郷土教育, 生活価値, 体験価値, 地方創生

## 1. はじめに

### (1) 研究の背景と目的

近年、都市への人口集中が進む一方、地方では若者の人口流出や過疎化が進んでおり、地域コミュニティの弱体化が課題となっている。地域社会がもつ特有の課題を解決するには、地域を支える担い手をいかに育成・確保するかが重要な課題であり、地域社会との連帯や内発的発展を生む地域づくりのあり方が問われている<sup>1)</sup>。

歴史的には、明治維新以降の画一的な教育制度への反省や昭和恐慌による農村疲弊を背景に、郷土教育運動が盛んに行われた。板橋<sup>2)</sup>は、大正後期から児童の主観的な郷土の体験を拡充する新しい郷土教育が生まれ、農村振興を行う人材を育てるために多様な郷土教育の実践が行われたことを指摘している。これらの教育は社会教育と連動して行われていた。このように、都市の発展による農村疲弊や、失われ始めた郷土への意識を取り戻すために、児童を中心とする郷土教育の重要性が広く認識されていたのである。

郷土教育運動を主導した郷土教育連盟はその発行する機関誌に、農学、地理学、歴史学等の学者や団体、教育実践の場にいる教師など、あらゆる分野から論考を集めた<sup>3)</sup>。郷土教育連盟は、諸学問を統合した総合的な観点から郷土のあり方を再考するために各地で講習や指導を行い、昭和初期に郷土教育運動は全国的な盛り上がりを見せた。高島<sup>4)</sup>は、昭和初期の郷土教育運動の背景に、実地での感覚的認識や経験に基づく直観教授の考え方が影響していると指摘している。実際に、愛知県第一師範学校では、児童の直接体認する郷土によって郷土観を確立しようとした<sup>5)</sup>。また、神奈川県田島小学校では、生活科が新設され、児童の生活体験を中心とする郷土教育実践が図られた<sup>6)</sup>。一方で、これらの事例において、個々の学習内容が郷土文化とどのように関連しているかはほとんど記されておらず、教育理念と学習教材・カリキュラムの乖離がみられた点が課題とされている。

このように、昭和初期の郷土教育の実践者は、児童の体験や直接経験に基づく直観的な理解を特に重視していたことがわかる。一方で、先行研究においては、実際の

学習カリキュラム構成において児童の精神構造の発展をどのように導くか、郷土文化との学習内容をどのように関連づけるかという点が実践上の課題として残されており、体験・直感的理解を導くための具体的方法は明らかになっていない。

本研究で取り上げる大分県女子師範学校の郷土教育は、児童の体験価値を重視し、郷土文化と結びつけた体系的な学習カリキュラムを作成していた点で全国の学校・師範学校の中でも注目すべき事例である。本研究では、この大分県女子師範学校の郷土教育実践を対象に、昭和初期当時の郷土教育の思潮と比較しながら、児童の主観的体験を重視する郷土教育の学習目的と実施方法について明らかにする。

地域に根ざした文化は郷土への誇りや愛着を深め、個人や社会のアイデンティティを形成する<sup>7)</sup>。地域特有の文化を深く理解することは、地域づくりや景観まちづくりの持続性を高めるためにも重要であり、景観の創造性を生み出す源泉ともなり得る。したがって、昭和初期の郷土教育の思想と実践を見直すことは、当時と同様に地方衰退の問題を抱える今、地方創生の実践理論を考える上でも十分に意味あるものだと考える。

本稿第2章では、文部省の方針が客観的な主知主義の郷土教育から児童の主観を重視する体験主義の郷土教育へと変更されたことを示す。第3章では、体験主義の郷土教育を実施していた学校のうち、学習カリキュラムや指導内容が具体的に記述されている大分県女子師範学校の郷土教育を対象として、その具体的な実践方法を明らかにする。なお本稿では、文章の引用において、旧字体を新字体に直し、句読点を加筆した。

## (2) 研究の位置づけ

先行研究として、郷土教育連盟に着目して郷土教育の系譜を明らかにした三宅<sup>8)</sup>の研究や、昭和初期の和歌山市の郷土芸術の実態を明らかにした神田<sup>9)</sup>の研究、山梨県師範学校を対象に生徒と職員の共同による郷土室の活用の実態を示した外池<sup>10)</sup>の研究がある。上記の研究を踏まえつつ、大分県女子師範学校の日本の郷土教育の中でその位置づけを整理したい。

郷土教育は明治期から存在したが、当初は地理や歴史、理科等の実科教育の準備段階としての方法論的郷土教育であったとされる。大正期に入ると、牧口常三郎により全学科の郷土化、学科統合の中心としての「郷土科」が提唱され、郷土の発展に貢献する態度の形成、すなわち愛郷心の養成、人格形成まで結びついた目的論的郷土教育が主張され始めた<sup>10)</sup>。大正後期には、児童中心の自由教育の影響を受け、児童の生活や体験に焦点を当てた郷土教育が展開される。体験主義の郷土教育実践の起源として知られるのが奈良女子高等師範学校附属小学校であ

る。同校の「合科学習」においては、生活即教育の考え方のもと、児童に自然や社会、学校、家庭などの郷土的環境を与え、自発的な学習を促して、児童の生活を発展させる教育が重視され、学習経験の場そのものとして郷土が捉えられた<sup>11)</sup>。また、東京女子高等師範学校附属小学校の「全体教育」においては、郷土は児童の観察および経験の総体として捉えられ、児童の学習体験そのものを重視する郷土教育が主張されていた<sup>12)</sup>。このように、大正後期以降、生活や体験の価値が郷土教育において非常に重視され始めた。しかしながら、管見の限り、体験主義を中心とする郷土教育を対象とした研究において、学習カリキュラムの中で郷土文化と体験を結びつける指導内容が明確に示されていない。本研究では、具体的なカリキュラムや指導実態から、体験・直感的理解の具体的方法を分析し、その考え方や工夫を明らかにする。

文献の収集には2023年6月時点の国立国会図書館オンライン (NDL ONLINE) にて、キーワード検索機能を用いた。体験主義に基づく郷土教育の実態を探るため、「体験教育」「体験 郷土教育」「郷土体験教育」でキーワード検索を行い、出版年を体験教育運動の黎明期である1918~1940年として絞り込んだ。2章では、体験を重視する郷土教育の目的と方法が理念として記載されたものを抽出し、3章では、郷土に基づく体験教育の具体的方法が示された大分女子師範学校に着目して論じる。

## 2. 体験主義の郷土教育の思潮と目的・方法

### (1) 文部省と海後らによる郷土教育の調査

昭和2年8月3日、文部省照普四八號「郷土教授に関する件」が公布され、普通学務局長、各高等師範学校、師範学校附属小学校、各府県において郷土教育を行う小学校に宛てて以下の項目が調査された<sup>13)</sup>。

- 1) 特に時間を設けて郷土教授を行う場合、その学年、時数、教授要項等 (具体的な教材)
- 2) 教授時間外において郷土愛好の念を養成する施設 (郷土史料の展覧、郊外教授、年中行事等) とその学年、時期 (具体的な施設要項)
- 3) 郷土教育に関する意見とそれに関する事項

海後らは、文部省の許可を得て報告書を調査している。調査したほとんど全ての学校 (約500校) から回答があったが、系統的かつ意図的に郷土を教授するものは「全国の小学校数から見て少きものであった」とされる。

さらに、海後らは昭和6年12月28日に質問書を作成して追加調査を行った<sup>14)</sup>。調査対象は、昭和2年の文部省による調査に回答した学校のうち海後らが選定した104校と、郷土教育について特に研究を行い何らかの施設を設けている学校161校、各府県から71校を合わせて

443校である。報告書の質問項目は下記の通りである。

- 1) 郷土教育を始めた理由とその時期
- 2) 郷土の範囲をどのように考えるか
- 3) 郷土教育の実際について、どのような教科目においてどのような方法で行うか。また、どのような郷土教育の施設を設けているか。

上記の調査の結果、57校から回答があった。その結果を表-1に示す。回答数が限られていることを念頭におく必要があるが、郷土愛の涵養や郷土理解を目的とする郷土教育が明治期から存在したのに対して、児童の生活や体験を根拠とする郷土教育が大正後期から新たな思潮として現れていることがわかる。

昭和5年から6年にかけて、文部省は師範学校の郷土教育に補助金を交付し、郷土教育施設建設が各地で相次いだ。昭和5年11月には郷土教育連盟が結成され、機関誌『郷土』が発行される。さらに、同月18日から20日にかけて東京市小学校教員会主催の第七次全国連合小学校教育総会が東京帝国教育会館で開かれ、文部省第八号議案が決議された<sup>15)</sup>(表-2)。これをみると、文部省が、郷土教育の新たな思潮である生活・体験を重視する郷土教育の実施を図っていたことが読み取れる。また、郷土教育の目的として、体験学習を用いた郷土の活用が重視され、郷土の範囲にも児童の主観的な生活領域が反映された。

### (3) 児童の体験を重視した郷土教育の目的と方法

国立国会図書館オンライン(NDL ONLINE)のキーワード検索機能を用いて体験を重視する文部省や学校教員の言説を抽出し、郷土教育の目的と方法を整理した。

郷土教育の目的について、文部省社会教育官の金井浩は、郷土の自然や風物、郷土人に触れることで、郷土愛が育まれ、そして郷土の繁栄を願うことが、日本人としての自覚そして愛国心を醸成するとしている<sup>16)</sup>。金井は郷土の資源に触れることが「真の日本を体験」することだとし、「郷土の特質」に基づく教育によって「真の人格教育」が遂行達成されなければならないとする。鳥取県上灘小学校の峯地や大西においても同様に、「郷土個に自覚した地方主義の教育」によって、「真の人間性」が培われ、人格陶冶につながるとされた<sup>17)</sup>。このように、郷土教育の目的として、児童の郷土愛や愛国心が醸成され、それによる人格陶冶がなされることが理想とされた。

また、郷土教育の方法として、教育過程における体験価値が重視され、それによる郷土的情操や郷土愛の涵養を図ることが重視された。峯地・大西<sup>18)</sup>は、教育が「永遠に未完成」であることは「生長」の可能性を残しており、教育過程において「絵画、彫刻、玩具、機械創作、詩歌、研究実地踏査等」を行い、「自ら実験し、自ら行為し、自ら工夫」することが最も重要であるとしている。

表-1 海後の郷土教育の調査内容(括弧内は回答数)

<b>1-1.郷土教育の実施理由(57校)</b>
郷土を理解させるため(33校)、郷土愛の涵養のため(32校)、方法的原理(地理、歴史、理科等の予備教授)として(11校)、児童の生活・体験を根拠とする(8校)
<b>1-2.郷土教育の開始年(51校)</b>
明治41-大正4:3校、大正9-14:11校、昭和元-6:37校
郷土理解を主な理由とするもの:明治42以降 郷土愛涵養を主な理由とするもの:明治41以降 方法原理を主な理由とするもの:大正9-14 生活・体験を主な理由とするもの:大正12以降
<b>2.郷土の範囲(57校)</b>
市町村に限定(17校)、市町村を中心とした地方(14校)、国家(1校)、学年が進むにつれて市町村-地方-国家へと動的に広がる(11校)、主観的な生活領域(14校)
<b>3.郷土教育の実際</b>
科目の郷土化(教科目全体、特定の科目、系統案作成中)、郷土科の特設(統合教科、基礎教科)、郷土に関する教科書(郷土読本、郷土地理書、郷土歴史書・郷土誌)、郷土室、郷土調査・郷土研究、郷土講話・講演会、郷土遠足・見学、提示教育・郷土雑誌新聞、郷土奉仕日、郷土行事・郷土暦、郷土学芸会・郷土展覧会、郷土遊戯・郷土カルタ・郷土双六、郷土会館・郷土記念館、郷土偉人祭祀・郷土神社参拝・郷土寺院参拝、など

表-2 文部省第八号議案の内容

<b>郷土教育の目的</b>
1「 <b>具体的直接的体験的学習を重視し郷土を活用すべき</b> 」 2「教育の地方化實際化を図り <b>実生活の順応</b> を期する」 3「郷土の自然と文化により児童生活を指導し郷土愛の合流を以てし国家愛に発展せしめ国民教育の目的を遂行すべきこと」
<b>郷土の範囲</b>
1「児童心身の発達段階に応じて <b>順次発展せしむべき</b> 」 2「 <b>児童の直接観察をなし得るべき範囲内の土地</b> 」
<b>郷土調査</b>
1「各教科につき郷土より最も適切なる材料を選択」 2「児童の心身発達段階に <b>適応する郷土教材の配列</b> 」 3「 <b>郷土の自然に接し具象的体験をなさしむべき場所並に材料を調査する</b> 」 4「郷土文化を理解しその文化開発に <b>適切なる教材を選ぶべき</b> 」 5「郷土の現勢調査をなし其の市町村の地理的行政的産業的経済的地位の研究をなし地方の <b>実際に適応すべき教育</b> を立つべき」 6「 <b>公民的職業的指導に対する教材の選択</b> 」 7「 <b>郷土中心の教材細目教育系统案等を作成すべきこと</b> 」 8「 <b>郷土室を設け郷土科学学習時間の特設を計るべきこと</b> 」
<b>郷土教育の方法</b>
1「 <b>具体的直観的学習の立案</b> 」 2「 <b>実地につきて直接学習せしむべき方案を立つべき</b> 」 3「 <b>一般的教材は之を郷土個性によりて之を活用すべき</b> 」 4「 <b>郷土的生活体認より郷土愛に導き国民生活に及ぼす</b> 」 5「 <b>郷土の實際生活に適応し実社会に活用すべき素養的訓練を施すべきこと</b> 」

三重県女子師範学校主事の中村<sup>19)</sup>は、児童の生活環境を郷土として認識し、「渾一的な生活指導によって道徳、政治、宗教、芸術、科学、経済、社会等の生活体験」をさせることが文化を理解する上で重要であるとしている。郷土教育の過程が郷土教育の方法であり、目的であるとし、結果よりも過程の体験そのものに「いい知れぬ貴さ」を見出している<sup>20)</sup>。金井<sup>21)</sup>も、郷土教育においてはまず教師も児童もその郷土を抽象的ではなく具体的に理解すべきだとし、詳細な調査や研究を通して、「児童を郷土に接触せしむる」必要があるとしている。また、田島小学校校長の山崎<sup>22)</sup>は、郷土文化を通した「文化創造と文化体験」を重視し、「児童の出生と共に其の意識に働く郷土を基調として、郷土文化の概要を関係的、全体的、価値的に把握了解せしめて、精神的に深い感銘体験を構成し、郷土的情操、郷土愛を涵養して、人格の基礎を陶冶し、遂には国家の創造発展にまで到達」させることを重視した。これにより、児童に「郷土の一員として」の自覚をもたせ、郷土愛を涵養することが郷土教育の意義であると述べている。

### 3. 大分県女子師範学校の郷土教育の実践手法

#### (1) 郷土教育の目的と郷土の範囲

大分県女子師範学校（以下、大分校）では、従来の画一的な郷土教育（方法的原理を含む）の欠点を補う方法として、「体験教育」の方法が用いられた。郷土教育の意義について、以下のように記述されている。

「真の郷土教育は郷土に於ける土地及び自然に関する直感的事実的知識の取得を以て重要目的とするものでなく、却ってこの地域に住する人類の歴史的社会的生活を明にし、種々の伝説、事件、努力、奉仕、創造等の事績に基づき郷土文化の概要を関係的全体的価値的に把握せしめて、児童の心中に深い感銘体験を作り小宇宙としての郷土観を形成し純真な郷土的情操郷土愛を涵養し人格の基礎を陶冶し発展せしめるのを以て目的となすべきであるとし、ここに事実方面よりは当為的方面をより尊重せんとする<sup>23)</sup>」

すなわち、郷土教育は、事実や知識を地域に当てはめて理解するのではなく、地域の文化に触れる「感銘体験」を通じて郷土的情操や郷土愛を涵養することが重要であった。また、郷土教育は「児童をして体験に依って、正しく郷土を認識せしめ、愛郷心を培養し、善良有為なる公民を養成し兼ねて各教科領解の基礎たらしむるにある<sup>24)</sup>」とした。

郷土の範囲について、大分校は、行政区など固定的に限定するのではなく、動的または相対的な立場とし、「郷土の本質を以て客観的存在物と考えずに、心理的

感情的のもの歴史的文化的社会的なもの主観客観の交渉に依って成れる具体的実在即ち体験的に同化された自然」とした。また、児童の心身の発達や境遇の変化によって「最初は家及び学校を中心とする郷土、次に学区域を中心とする郷土、市町村を単位とする郷土、府県を中心とする郷土と順次拡大せられて遂に国家全体を以て我が郷土なりと意識せしめるまで到達せしめる」とした<sup>25)</sup>。

以上、大分校の郷土教育の考え方や海後らの調査と比較すると、大分校の郷土教育の目的や郷土の範囲の考え方が、大正後期より新たに生まれた児童の体験や生活を根拠とする郷土教育と一致していることがわかる。

#### (2) 郷土教育の実施方案

すでに述べたように、大分校の郷土教育は、事実面（地理的知識や理論）よりも当為面（郷土はどうあるべきか）を基礎とする体験主義の郷土教育であった。では、実際にどのような学習目的やカリキュラムによってそれを実現しようとしたのだろうか。

『体験主義に拠る郷土教育』には第三章に「郷土教育実施法案」として、具体的な調査の方針や項目、各学年の学習配当案（表-3）が記されている<sup>26)</sup>。一学年の期間で、地域内に属する調査事項を網羅するような学習配当であることがわかる。また、調査区域は学年が上がると

表-3 各学年学習配当表

三月	二月	一月	十二月	十一月	十月	九月	六月	五月	四月	学年
総括	停車場	松栄神社	年の市	中島	上野	春日浦	坊ヶ小路	私の家	私の学校	尋一
総括	荷揚町	春日神社	年の市	浄水場	連隊	浜の市	大分川	上野	碓山	尋二
総括	学校付近	連隊	年の市	汽車と汽船	東大分村	春日浦	南大分	碓山	仏崎	尋三
総括	工場巡り	杵原	年の市	荷揚城	上野	水源地浄水場	西大分	大洲の浜	瀬尾	尋四
総括	上野	市の交通	竹町	佐賀関	南大分	杵原	大分湾	工場巡り	別府湾	尋五
総括	市政一般	史跡巡り	市場	市の工業	市の金融	商店調査	市の衛生	高崎山	西大分	尋六
総括	工業調査	工業調査	東大分村	西大分	市の農業	南大分	別府市	郷土史その二	郷土史その一	高一
総括	市政一般	市政一般	金融調査	市の商業	衛生施設	市内職業調査	市の交通	社会施設	文化施設	高二

表4 大分県女子師範学校における郷土教育の実施方法

調査事項		指導目的の典型例 (括弧内は学年・月)	指導の手順や特徴
我が家の調査	宅地、建物、家族、家業、宗教、家庭生活の状況、学校までの順路	(1-5)児童の最も親しい環境、家庭、周囲の生活を学習させて私の家を正しく認識させると同時に、家庭生活の感想等を発表させて我が家に対する愛着心を深め家庭生活態度を養う	学習動機の喚起、家族に対する印象整理、家族中の一人についての印象発表、家庭団欒の絵画的表現、家族の人員比べ年齢比べ、家庭生活態度の指導、唱歌による我が家礼賛
我が校の調査	校地、校舎、職員、諸設備	(1-4)校舎校庭を巡視して学校の諸機関、自然物を観察させ、遊戯の生活価値に学習させて、学校が面白く楽しいところであることを味わせ、学校生活における習慣態度を養う	校舎巡視、校庭巡視、遊戯生活の学習化、学校生活態度の指導
自然	位置・地形・地勢、地質、動物・植物・鉱物、気象	(6-5)高崎山の史跡を尋ねて、北西の由布の秀峰、南の九重連山、眼下の別府湾を眺め、沿岸の都邑を配した大自然の雄大な妙筆を味わせる。大分市が東九州における中心都市として、将来大いに発展の余地あることを感じさせ、高崎山が別府大分の間に介在する影響を考察させる	高崎山の岩質とその成因、沿道の樹木、山上からの展望、歴史上の高崎山の説明、高崎山の位置(風景上の影響：形状は極めて簡単だが他の連山が遠く後方に聳立しているため、一帯の風景に一人の妙趣を添えていること)、交通上の影響、帰途の学習事項、整理
戸口、労力	職業別戸口、年齢別性別人口、出産・死亡、来住と往住との状態、一日の労働時間、年内労働日数など	(高 2-9)市内の職業・労働の状態を見学させ、直接または各種の資料から職業内容特に労働賃金等を明らかにし、市内職業の一般を了知させると同時に、将来における職業選択の予備的研究を行わせる	有意的に市内を巡視させ職業状態の実際を概観し、自己の趣味、傾向と一脈の関係を持つ職業に留意させる。市経営の職業紹介所に行き係員から職業内容、普通賃金、就職手続き等を聴取する、自己に最適な職業調査内容の発表など
農林業	耕地(田畑)・山林・宅地未開墾地面積、灌漑用水、組織経営、作物種別面積、農産品収穫高、副業	(1-6)坊々小路の付近一帯の自然及び人文の景物を体験させ、田圃の広がり注意到、田圃見学をさせて田圃情緒を味わせ、稲の成長からお米になるまでの大略を知らせて働きの楽しさや尊さ、またお米を大切にすること心持ちを指導する	出発前の指導、往路の指導、田圃見学、自由観察、帰路の指導、帰校後の指導(見学事項の発表：田圃の様子を図画と文章で直感的に表現させ、見せ合って話し合う、など)、反省整理
商工業	人口・戸数、従業者及び労力、工場(種別)、生産高及びその販路、商店、取引高、取引方法、市場など	(1-12)賑やかな年の市を見学させて歳暮の商店街上の気分を味わせ、さらにその社会現象を教室に取り入れて子供同士で行い、数、国語の生活の充実を図ると同時に各商店の特色景況等をはっきり認識させる	出発前の指導、実地見学、帰校後の指導(年の市ごっこ：学校で年の市を開くことを協議し、数人ずつ班分けし店の種類を決める、飾りや広告作成を行い、お金を模した券を渡して計算させるなど)、感想発表、教師による批評
水産	漁場、従業者、漁船並に運用、漁獲高、水産品取引	(3-9)春日浦で春の潮干狩りや夏の海水浴などした経験をたどり追憶の情を深め、地理・史実・伝説等を了解させ、さらに付近一体の公園と漁村の情緒とを汲み取らせる	沖の浜(漁船帰る海浜の有様を観るなど)、魚市場(魚が家庭に入るまでの経路について考えさせるなど)、春日浦、帰途大分県立工業学校、大分警察署を見る、帰校
金融	金融機関、貸借方法、金利、支払勘定の慣行、貯金	(6-11)銀行の見学をなし銀行事務の一般を知らせ、郷土の金融状況の概要を理解させる	銀行一覧表、営業案内の調査、銀行見学(営業部長の説明)、銀行の使命、市の商工業と銀行業の関係をまとめる
交通運輸	交通運輸の機関、交通量・運輸量、港湾、従業者、交通運輸の整理	(5-1)市が東九州交通の要衝地であることを了解させ、市内外交通の盛衰と市民生活とが深い関係を持っている理由を考察させる	大分港による海上交通が陸上交通にどのような便益を与えているかを考察させる、交通量調査の比較により自己の調査地域の現状を領解させる
通信	機関、従業員、郵便電話の使用量、ラジオ加入者数	(2-2)荷揚町で県庁、公会堂、郵便局、電話分室、待屋敷風の面影を多分に留める県庁付近の家の建て方等を見学させて、荷揚城のそびえ立っていた頃の荷揚町の様子を想像させると同時に現在の荷揚町の様子を学ばせる	郵便局で、葉書・手紙が多くの人によって届けられることを感じさせる、電話分室で、家庭や学校で受話機を取ればすぐに交換室につながり、交換手の手によって中継ぎされ話ができる便利さを感じさせる
自治	自治制実施以来の状況、自治の機関、自治行政とその事業、財政、警察・犯罪・消防など	(高 2-1-2)市政の伸張、市民の幸福と密接不離の関係にある市の財政状況を理解せしめ、愛市の観念と納税に対する義務心を喚起し、善良なる市民の育成に資すると共に、将来の施設と財政関係との考察を行わしめる	市役所での聴取(市制施行以来の財政膨張の状況、将来に対する財政方針など)、歳入・歳出等の統計を通して児童に研究させる、開会中の市会見学、市政運用(市の理念、市会議員の職責、一般市民の心得)
各種団体	農会、商工会議所、産業組合、同業組合など	(5-11)佐賀間町付近一帯の調査研究を行い、産業・軍事・海上交通上重要な位置を占める理由を理解させる	缶詰工場見学(参額や取引関係について)、製錬所見学(鉱石の研究、電解装置の見学など)、佐賀間町の大観
教育宗教	小学校、中等学校、青年及び成人教育機関、青年団、図書館、その他の教育機関、神社、寺院、信仰など	(2-9)郷土大分市における祭典の中で最も長期に亘り、最も興行的気分に入る浜の市のお祭りに参拝して、敬神の念を養うと同時に浜の市情緒を味わせ、浜の市の祭典を起源として発達した西大分の景観も大観させたい	予備指導(児童の濱の市祭典に関する生活経験を発表させにぎやかな情景を描き出させる)、現地指導(海辺の土手や松林から美しい自然を観賞させる、浜の市のお宮で神前で一同敬礼をさせ黙祷させる、など)
共同生活	衣食住の状況、社会娯楽、風俗習慣、年中行事、など	(高 1-6)温泉都市としての特色及び別府市の現勢を知らせ、さらに大分市民の休養地としての別府市を了察させる	高台からの眺望や流川通の商店調査により温泉都市の特色を味わせる、市役所訪問、砂湯、共同温泉見学
衛生	風土病、衛生思想、伝染病、上水・下水の状況など	(6-6)市の衛生機関と施設の概要について学習し、公衆衛生を重視すべき理由を学ばせる	上水道系統の調査、下水道の視察、市役所衛生課主任の講話を聞く、汚物焼却場の視察、上野病院の参観、整理
歴史	郷土開発の沿革、政治上の沿革、名所旧跡、人物、伝説	(2-1)春日神社に参拝して一年の安泰をお祈りし、神に参りする時の美しい心境に浸らせ敬神の念を養う。神宮寺浦といわれた頃の春日浦における外国貿易や、浦辺の商館、異人の往来等商業地としての一大繁盛を極めた往時の姿をはなして郷土の英雄大友宗麟を偲ぼせる	郷土室にて学習(模型地図)、神社の名と場所を学び神社参拝の順路を考察させる、年の始めの初詣りの体験を話させる、目的指示、現地指導(春日神社-春日公園-忠魂碑参拝-春日浦-南蛮貿易場址の碑)、整理整頓

ともに拡大し、その調査内容も深化する方針で、学年とともに、郷土の範囲が拡大深化する設計が行われた。

調査においては、調査方針を確立し、原則「児童主体の調査」とすべきとした。また、「郷土的体験と自覚的意識的に児童の人格中に織り込みそれを発展せしむる」ため、調査の結果そのものを重視せず「調査することそれ自身教育上価値があり、それに依って郷土を真に了解し得る」とした。「郷土社会の内面」を探るために、過程を尊重し、毎年繰り返して児童に体験させることが重視されていた。

また、同書「実際編」において、各期日における指導目的や指導のプロセスが記載されている(表-4)<sup>27)</sup>。以下にその特徴を示す。

- ・児童主体の教育方針に基づき、現地調査すべき事項と方法を児童自身に考案・工夫させ、調査研究、調査内容の発表に至るまでが児童中心の指導内容となっていた。例えば、年の市(1-12)では、商店街で行われる市場を見学させて、実際に、子供同士で協議させて、市場を開催し、経済を体験させるなどの工夫がみられた。
  - ・教授の方法として、間接的な手段ではなく、校外での教育に重点が置かれ、経済や産業・工業などの説明においても、地域調査に基づき実地での情感や児童自身の経験と結びつけて指導を行っていた。例えば、春日浦(3-9)では、児童が長浜神社から付近の漁村を通して、春日公園や海岸に行く経路が選ばれた。早朝の漁村の情趣や海での遊び、大分港の広大な眺めを体験させつつ、沖の浜の伝説や大友時代の繁栄への追憶の情を深められるよう設計されている。
  - ・現地見学を通して体験した情感を、絵画的表現や文学創作などで表現させるなどの表現方法の工夫がみられた。例えば、坊ヶ小路(1-6)では、水の流れや田んぼ道、百姓の身支度などを観察させて、田園風景の広がりについて注意させて、田園情緒を味わせる工夫がなされた。また、帰校後にその様子を図画と文章で直感的に表現させ、見せ合って話し合いながら、農夫の苦労や心配を想像させ、労働の楽しさ、作物を大切に作る心などを指導するとしていた。
  - ・郷土の過去や現在を正しく認識するだけでなく、その改善と発展を企画する精神の涵養が意図された。例えば、西大分(高 1-11)の授業では、大分港と西大分方面の大観を見学して港に必要な条件を知らせ、さらに、西大分方面の貿易場としての歴史や地形、重要建築物の実地調査が行われた。さらに、大分港の将来計画を知らせた上で、児童を数組に分けて調査が行われ、周辺集落や地方産業との関係を学ばせた上で、大分港改修と海陸連絡設備の理想案を作製させ、将来計画と市民の覚悟を整理させる方法がとられた。
- 以上のように、大分校においては、児童主体の教育

方針に基づき、現地指導を伴う地域調査が実施され、自然環境や文化景観の体験によって児童に豊かな情感を与え、さらにその情感を芸術表現させる工夫がなされた。これにより、郷土愛や郷土自治の精神を涵養し、郷土の改善や発展を企画する人材の育成を図っていた。

#### 4. まとめ

本研究では、昭和初期における大分県女子師範学校の郷土教育実践を対象に、体験主義に基づくカリキュラム学習と指導の内実を明らかにした。

第2章では、文部省による郷土教育に関する調査(1927)と海後らによる追加調査(1931)の結果を整理し、大正後期に児童の生活や体験を根拠とする新しい郷土教育の思潮が生まれたことを示した。また、この体験主義による郷土教育を重視する方針が、文部省の政策にも表れていたことを示した。

第3章では、体験教育を提唱する大分県女子師範学校の郷土教育の目的と郷土の範囲の考え方を示し、それが具体的なカリキュラムや指導方法にどのように反映されたのかを示した。大分県女子師範学校の提案する学習カリキュラムにおいては、学校外での実地踏査が児童主体の発案をもとに行われた。指導においては、田園景観や漁村の情緒など、自然と人との豊かな関係性を実地での体験を通じて味わせ、その情感を表現・議論する工夫がみられた。このように、各時間割における学習目的と指導内容を詳細に示すことにより、児童が体験・認識する郷土の範囲を拡充し、郷土愛や郷土自治の精神を涵養することで、郷土の改善や発展を企画する人材の育成を図っていたことを示した。

なお、他地域で行われた体験教育の学習カリキュラムとの詳細な比較や実施体制の詳細などについては今後の研究課題としたい。

#### 参考文献

- 1) 国土交通省：第2部第9章多様な主体による共助社会づくりの実現に向けた基本的な施策，国土形成計画(全国計画)，pp.159-162, 2015.
- 2) 板橋孝幸：近代日本郷土教育実践史研究 農村小学校教員による地域社会づくり構想の展開，風間書房，2020.
- 3) 三宅達也：わが国における郷土教育の系譜に関する研究 郷土教育連盟による活動を中心に，新地理，Vol.26, No.4, pp.45-68, 1979.
- 4) 高島秀樹：『我國に於ける郷土教育と其施設』調査の検討(その2) 「地域社会と学校教育」の視点から，明星大学社会学研究紀要，No.28, pp.21-36, 2008.
- 5) 青野春水：社会科教育の源流：昭和初年の郷土教育，社会科研究，Vol.15, pp.22-28, 1967.

- 6) 金子知恵：田島小学校の理論と実践 文化教育学の移入とその限界, カリキュラム研究, No.13, pp.61-73, 2004.
- 7) 文化審議会：文化を大切に作る社会の構築について 一人一人が心豊かに生きる社会を目指して (答申), 文部科学省, 2002.
- 8) 神田孝治：昭和初期の和歌山市における郷土芸術運動の変容と郷土概念の変奏, 人文地理, Vol.56, No.1, pp.59-76, 2004.
- 9) 外池智：昭和初期における郷土教育の施策と実践に関する研究 『総合郷土研究』編纂の師範学校を事例として, 筑波大学大学院教育学研究科博士論文, 2000.
- 10) 中川浩一：直観原理に基づく地理教育の系譜と牧口常三郎, 東洋学術研究, Vol.33, No.2, pp.25-42, 1994.
- 11) 吉村敏之：奈良女子高等師範学校附属小学校における「合科学習」の実践 教師の「学習」概念に注目して, 東京大学教育学部紀要, Vol.32, pp.275-283, 1992.
- 12) 河南一：肅正された「社会科」 東京女高師附小における「社会科」実践の研究(2), 社会科研究, No.43, pp.11-20, 1995.
- 13) 海後宗臣, 飯田晁三, 伏見猛彌：我國に於ける郷土教育と其施設, 目黒書店, 1932. pp.41-48.
- 14) 海後宗臣, 飯田晁三, 伏見猛彌：我國に於ける郷土教育と其施設, 目黒書店, 1932. pp.190-270.
- 15) 帝国教育会：全國聯合小學校教員會議, 帝国教育 (1 月號), No.581, pp.108-132, 1931.
- 16) 金井浩：総合郷土教育原論, 同文書院, 1931. pp.92-97.
- 17) 峯地光重, 大西伍一：新郷土教育の原理と実際, 人文書房, 1930. p.4.
- 18) 峯地光重, 大西伍一：新郷土教育の原理と実際, 人文書房, 1930. pp.12-13.
- 19) 中村勇吉：各科実際の郷土教育, 厚生閣書店, 1931. p.5.
- 20) 中村勇吉：各科実際の郷土教育, 厚生閣書店, 1931. pp.29-30.
- 21) 金井浩：総合郷土教育原論, 同文書院, 1931. pp.96-97.
- 22) 山崎博：郷土教育の再吟味 研究と批判, 教育實際社, 1931. pp.79-81.
- 23) 大分県女子師範学校：体験主義に拠る郷土教育, 洽文社, 1932. p.23.
- 24) 大分県女子師範学校：体験主義に拠る郷土教育, 洽文社, 1932. p.25.
- 25) 大分県女子師範学校：体験主義に拠る郷土教育, 洽文社, 1932. p.20.
- 26) 大分県女子師範学校：体験主義に拠る郷土教育, 洽文社, 1932. pp.29-44.
- 27) 大分県女子師範学校：体験主義に拠る郷土教育, 洽文社, 1932. pp.45-278.